



Thank you, world.★

東日本大震災 復興支援レポート

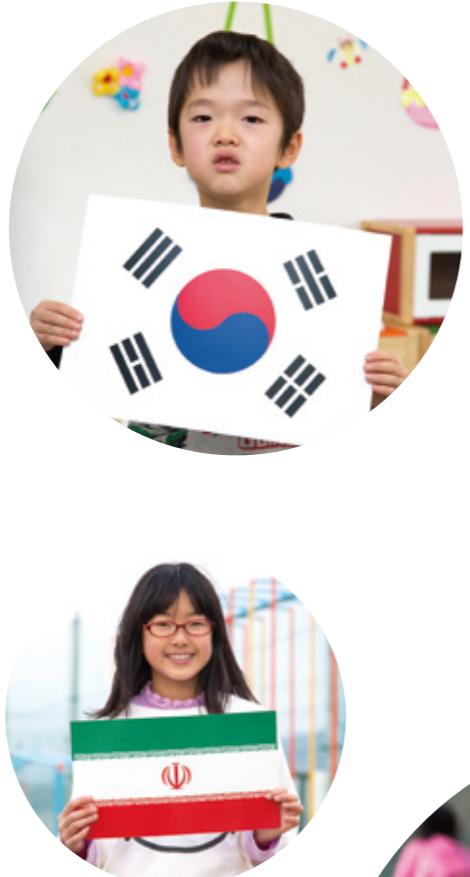
人間を救うのは、人間だ。Our world. Your move.



日本赤十字社
Japanese Red Cross Society

CONTENTS

- 05 緊急支援ドキュメント
- 06 復興への歩みを、支える
- 07 世界から届いた海外救援金
- 09 海外救援金の使い道
- 11 生活再建
- 14 福祉サービス
- 15 教育支援
- 17 医療支援
- 19 災害対応能力強化
- 20 原発事故対応
- 21 さいごに





ありがとう、全世界★

赤十字に届いた海外救援金1000億円が被災地の復興を支えています。

写真は支援国・地域の一部です。くわしくは7ページをご覧ください。



3.11

10トントラックに
毛布を積み込み



3.12

高速道路を北上する
赤十字の救護車両の列



3.14

救護班が全国の
赤十字病院などから出発
(計896班)



緊急支援ドキュメント

日本赤十字社は震災直後から、医療救護活動、救援物資の配付、炊き出し、義援金の受付などを行いました。こうした緊急支援活動の財源は、毎年5月の赤十字運動月間キャンペーンなどで全国の皆さんからいただき活動資金です。日頃からのご協力があればこそ、訓練や備蓄などの「備え」ができ、いざという時に迅速に対応することができます。全国各地で日赤を支えてくださっている皆さんに、改めて、心より感謝申し上げます。



3.19

点在する避難所を
巡回診療する医師ら



患者が殺到した石巻赤十字病院には
全国から赤十字の救護チームが
薬やミルクなどを持て駆けつけた



4.22

赤十字奉仕団が
温かいうどんを炊き出し



4.30

被災家屋の片付けを手伝う
赤十字ボランティア

3.11
2011 JAPAN



復興への歩みを、支える。

震災から1ヵ月、避難所から仮設住宅へと
生活環境が変わる時期から、海外救援金を活用して、
生活再建や教育、医療、福祉の分野で
赤十字の復興支援事業がスタートしました。

- 3.11
2011 JAPAN

1 アフガニスタン赤新月社
2 アルバニア赤十字社
3 アメリカ赤十字社
4 アンドラ赤十字社
5 アルゼンチン赤十字社
6 アルメニア赤十字社
7 オーストラリア赤十字社
8 オーストリア赤十字社
9 アゼルバイジャン赤新月社
10 バハマ赤十字社

11 バングラデシュ赤新月社
12 ベラルーシ赤十字社
13 ベルギー赤十字社
14 ベリーズ赤十字社
15 ボリビア赤十字社
16 ボスニア・ヘルツェゴビナ赤十字社
17 ブラジル赤十字社
18 イギリス赤十字社
19 ブルガリア赤十字社
20 ブルキナファソ赤十字社
21 カンボジア赤十字社
22 カナダ赤十字社
23 チリ赤十字社
24 中国紅十字会
25 コロンビア赤十字社
26 クック諸島赤十字社
27 コスタリカ赤十字社
28 クロアチア赤十字社
29 キプロス赤十字社
30 チェコ赤十字社
31 デンマーク赤十字社
32 ドミニカ共和国赤十字社
33 エクアドル赤十字社
34 エストニア赤十字社
35 フィンランド赤十字社
36 フランス赤十字社
37 グルジア赤十字社
38 ドイツ赤十字社
39 ホンジュラス赤十字社
40 ハンガリー赤十字社
41 アイスランド赤十字社
42 インドネシア赤十字社
43 イラン赤新月社
44 アイルランド赤十字社
45 イタリア赤十字社
46 ジャマイカ赤十字社
47 朝鮮赤十字会
48 大韓赤十字社
49 ラオス赤十字社
50 ラトビア赤十字社



51 リトアニア赤十字社
52 ルクセンブルク赤十字社
53 マケドニア赤十字社
54 マレーシア赤新月社
55 モルディブ赤新月社
56 メキシコ赤十字社
57 ミクロネシア赤十字社
58 モナコ赤十字社
59 モンゴル赤十字社
60 モンテネグロ赤十字社
61 ミャンマー赤十字社
62 ネパール赤十字社
63 オランダ赤十字社
64 ニュージーランド赤十字社
65 ニカラグア赤十字社
66 ノルウェー赤十字社
67 パキスタン赤新月社
68 パラオ赤十字社
69 パレスチナ赤新月社
70 パナマ赤十字社
71 ベルー赤十字社
72 フィリピン赤十字社
73 ポーランド赤十字社
74 ボルトガル赤十字社
75 カタール赤新月社
76 ルーマニア赤十字社
77 ロシア赤十字社
78 ルワンダ赤十字社
79 エルサルバドル赤十字社
80 サモア赤十字社
81 サンマリノ赤十字社
82 セルビア赤十字社
83 シンガポール赤十字社
84 スロバキア赤十字社
85 スロベニア赤十字社
86 南アフリカ赤十字社
87 スペイン赤十字社
88 スリランカ赤十字社
89 スウェーデン赤十字社
90 スイス赤十字社
91 台湾赤十字組織
92 タイ赤十字社
93 トンガ赤十字社
94 トリニダード・トバゴ赤十字社
95 ウガンダ赤十字社
96 ウクライナ赤十字社
97 アラブ首長国連邦赤新月社
98 ウルグアイ赤十字社
99 バヌアツ赤十字社
100 ベトナム赤十字社

上記の国・地域のほかに、クウェート政府(400億6,000万円)、国際赤十字・赤新月社連盟(2億3,785万円)から支援をいただきました。これらを含めて1,001億3,900万円となります

※アルファベット順



「苦しんでいる人を救いたい」。
一人ひとりの思いが集まれば、大きな支援に変わる。

震災対策が進んでいた日本で、これほど大きな被害が出てしまったことに、世界の人々は衝撃を受けました。そして、災害への備えの重要性を改めて強く認識したのです。世界189の国や地域に広がる赤十字ネットワークを通じて、日赤にはかつてない規模の海外救援金が寄せられました。貧困などの課題に直面している開発途上国からも届いています。世界の人々にいただいたのはお金だけではありません。温かい思いやりの心が伝わり、みんなの勇気につながりました。

報道で避難所のようすを知った人々
「避難所で暮らす高齢者への支援に使って」と寄付が寄せられました。
がれきに埋もれた町で、不便な生活に耐える被災者の姿に、
人間の強さ、素晴らしさを感じています。

スイス赤十字社 国際部長
Martin Fuhrer



高齢者施設で暮らす90代の女性が
「今年は自分の誕生日プレゼントはいらない。その分を寄付して」と
訴えるなど、同じ先進国の一員として、多くのフィンランド国民が
今回の震災を自分の問題として受けとめました。

フィンランド赤十字社 事務総長
Kristiina Kumpula



海外救援金の使い道

赤十字の基本方針にもとづき、被災された人々や行政と相談しながら、支援内容を決めていきました。

クウェートからの
原油無償提供による
復興支援事業
(日赤から岩手県、宮城県、福島県に配分)

400.6 億円

その他
(緊急支援・管理費など)

35.3 億円

3.II
2011 JAPAN
5
災害対応
能力強化
(防災倉庫の設置など)

35.8 億円

3.II
2011 JAPAN
6
原発事故
対応
(被ばく量測定器の整備など)

22.4 億円

総額
1001.4
億円

(2014年3月31日現在)

3.II
2011 JAPAN
1
生活再建
(家電セットの寄贈など)

297.4 億円

3.II
2011 JAPAN
2
福祉
サービス
(介護用ベッドの寄贈など)

19.6 億円

3.II
2011 JAPAN
3
教育支援
(スクールバスの整備など)

35.9 億円

3.II
2011 JAPAN
4
医療支援
(仮設診療所の整備など)

154.0 億円



2011年5月、小学校で保健師の話を聞く赤十字関係者(宮城県石巻市)

被災地を見て、話を聞いて、 どんな支援をすべきか、考えた。

海外救援金は、世界の人々が赤十字を信頼して託してくださったお金です。被災地の人々のために大切に使わなくてはなりません。日赤は復興支援推進本部を立ち上げ、被災地のニーズを調査。行政と重複しないよう調整しながら、支援の方向性を決めていきました。震災から2ヵ月後の5月、アメリカ、オーストラリア、イギリス、カナダ、中国など支援国の大代表団43名が来日。被災地を訪問し、ともに考え、復興支援の基本計画が決定しました。支援国は、1年後にも来日し、有効に活用されているか評価しています。

復興支援事業の基本方針

1. 国際赤十字のネットワークを効果的に活用する
2. 被災地域が広大のため、支援が偏らないよう公平に、そして迅速に進める
3. 国や県、市町村、他団体と協調して地域ニーズに応える
4. 国内外に対する説明責任を果たす
5. 日赤の資源を最大限に活用し、ハード・ソフトの両面から支援する
6. 地域に根づく活動として継承していく



このたびは、海外の皆さまの温かい支援と励ましに心より感謝申し上げます。その気持ちに応えるため、私たち赤十字はこれまで培ってきたノウハウと、日本ならではの事情を加味し、多くの皆さまのご協力を得ながら、復興支援事業を行ってきました。被災地の復興への歩みは、まだまだ続きます。これからも、国内外の皆さんとともに、被災された方々に心を寄せ、復興への歩みを支え続けてまいります。

日本赤十字社社長、国際赤十字・赤新月社連盟会長 近衛忠輝



1
生活再建



仮設住宅の暮らしを支える

復興に向かう被災地の人々の生活基盤づくりに貢献したい。

仮設住宅での暮らしを支えるために生活家電の整備などを行いました。

生活家電セットを寄贈

冷蔵庫、洗濯機、炊飯器、テレビ、電子レンジ、電気ポットを自治体や家電メーカーの協力を得て、寄贈しました。当初、対象は、臨時に建てるプレハブ仮設住宅の入居者7万世帯でしたが、全国各地に移住を余儀なくされた方々も多く、対象を広げて、13万世帯に一軒一軒お届けしました。

133,183世帯



入居したら家電が全部揃つていて、びっくり。おかげで義援金は食べ物や生活必需品の購入に充てることができました。

「暖かく過ごせるように」 冬場の寒さ対策

冬場の寒さ対策のニーズに応え、断熱シート、保温パットを配付。仮設住宅に併設された集会所や談話室にもコタツを提供し、住民同士が暖をとりながら交流できる場を支援しました。

729カ所／137,438点



バスの愛称「LOVE CROSS BUS」には、人の愛が伝わるバスになってほしいという願いを込めました。

コミュニティ・バスの運行を支援

山間部などに点在する仮設住宅に住んでいる皆さんに、通院、買い物などで市街地に出かけるときに必要な足として無料バスを走らせてています。

バスの愛称を公募して、「LOVE CROSS BUS～心と心をつなぐバス～」に決まりました。名付け親は、津波で自宅が流されて仮設住宅に暮らす志津川高校の男子生徒。通学でバスを利用しています。

宮城県南三陸町と福島県会津若松市で 9便／日



こころのケア

仮設住宅では近所の親しかった人と離れ、家に閉じこもりがちになる人も少なくありません。
不活発化、孤立化やストレスを防ぐために、赤十字ボランティアが活躍しています。

心も身体もあたたまる 「ほっとケア」

赤十字奉仕団(日頃から地域で活動)が仮設住宅で暮らす人々に、肩や腕を優しくさり、温かいタオルで顔や手をマッサージしながらお話を聞く活動を続けています。

262回 6,832人



「赤十字にこにこ健康教室」

健康を促進する講習会を定期開催しています。

710回 24,841人



おしゃべりをしながら手のぬくもりを伝えてマッサージすると、ボロッと気持ちの奥にあることを吐き出してくれるんですよ。

身体を動かすと気分転換になるし、みんなと会話できるのが楽しい。
「今日の予定は？」と思った時に、これがあると励みになるんです。



ノルディックウォーキングで運動不足を解消

2本のポール(杖)を使った歩行運動を赤十字ボランティアが中心となって行いました。

244回 2,452人



高齢者・障がい者を支える

震災で福祉施設が被災し、不安な日々を過ごしていた高齢者や障がいのある方への福祉サービスを回復し、安心して暮らせる基盤づくりを行いました。

207施設

338台



介護用ベッドの寄贈

寄贈先は、被災を免れた施設です。被災した施設から要介護者を受け入れたため、定員を超えて、床にマットレスを敷いて介護する状態が続いていました。

161施設

959台



仮設グループホームに家電や家具を寄贈

テーブルやベッド、テレビ、洗濯機、AEDなどを寄贈しました。

62施設 2,239点



公営の共同住宅などを建築

高齢者の孤立・孤独化を防ぎ、地域のコミュニケーションを維持できるよう、台湾赤十字組織(台湾の赤十字)の海外救援金を財源に、建てられました。中には珍しい長屋形式で建てられたものもあり、地域社会の再構築を目指す設計として注目されています。

9カ所 798戸





3
教育支援



子どもの 健やかな成長のために

子どもの笑顔は、まわりの大人たちも元気にしてくれます。

教育現場を支援するとともに、友だちと遊んだり、将来を見据えて視野を広げる機会を提供しました。

屋内遊び場 「赤十字すまいるパーク」を開催

原発事故の影響で外遊びが制限されている福島県内の子どもたちのために、巨大なエア遊具やボールプール、エアトラックなどの遊具をそろえ、思い切り体を動かす機会を提供。来場者は8万人を超え、大好評でした。

86,584人

早く同じ年齢の子と一緒に遊ばせてあげたかった。
元気に通ってくれて、よかったです。

こども園などの建設

町民全員が避難した福島県楢葉町。240人の園児が通っていた幼稚園の仮設園舎をいわき市に建てました。「楢葉町立あおぞらこども園」として再開されたのを機に、分散していた町民が少しづつ集まってきました。

8施設 定員 440人



仮設体育館の建設

福島県飯舘村の小学校3校合同仮設校舎(川俣町)に、仮設体育館を建てました。子どもたちだけでなく、村のスポーツ大会などでも活用されています。

3校 児童・生徒 1,088人



サマーキャンプ in 北海道

夏休み期間を利用して、被災地で生活する児童・生徒を北海道のルスツリゾート(留寿都村)に招き、3泊4日のキャンプを開催。(2012年と2013年に実施)

新しい友だちとの交流、乗馬や農作物収穫体験など、子どもたちの心身の成長を願う小・中学校の教諭と臨床心理士らがつくったプログラムで実施しました。

20回 5,788人



みんなさく
ありがとう
サマーキャンプ in 北海道



なつみさん(右)
(宮城県・小学5年生)



いっさくん
(岩手県・小学6年生)

津波で家の1階が壊され、家族4人で仮設住宅に住んでいますが、狭くて、大きな声で話せません。引っ越してしまった友だちもいます。プールも流されたので、今はあまりスポーツもしていません。ここに来て、外でいっぱい遊んだり、みんなで一緒に部屋で寝たりして、本当に楽しかったです。





4 医療支援



地域医療の 再生を支える

地域の医療機関が連携できる体制を復旧することが、患者さんの安心につながります。
被災地の方々の命と健康を守るために医療インフラの復興と整備に取り組みました。

気仙沼市立本吉病院

気仙沼の街も津波の泥をかぶってしまいました。
2013年1月、病院改修費用と医療機器の整備費の半額
(1.5億円)を支援しました。外来患者を約100人前後と、
寝たきりや通院が困難な在宅医療の患者約70人を診て
います。

年間外来患者 **23,724** 人 (2011年)

家や家族などを失った人が、外来に来るたびに泣
いていました。震災の影響は大きいですね。医療の
ニーズは高く、この病院が必要とされていると感じ
ます。ありがとうございます。うれしいし、もっとたく
さんの患者さんが診られるようにしていきたいです。
医師(院長) 川島 実先生



写真提供:本吉病院

女川町地域医療センター の再建

被災当時はのべ患者数48,549人が訪れる女川町立病
院でした。スイス赤十字社やスイス財団などから寄せら
れた海外救援金を財源に再建されました。

年間外来患者 **48,549** 人 (2011年)



石巻医療圏の再構築

宮城県の石巻医療圏(石巻市、東松島市、女川町)で、唯
一、被災を免れた石巻赤十字病院では、震災以来、患者
が集中し、病床の不足が続いていました。
そこで敷地内に、仮設病棟を増設。石巻赤十字病院に
新病棟が完成する2015年9月まで使われる予定です。
さらに看護専門学校の再建、災害医療の研修・訓練を行う
「災害医療総合センター」の整備も進めています。

年間外来患者 **298,722** 人 (2011年)





5 災害対応能力強化

次の災害に備える

私たちは、この教訓を忘れない。想定外の事態に苦しんだ今回の救護経験を生かし、災害対応能力の強化に取り組みました。



災害対策本部の車輛を救急車タイプに。

日本赤十字社の救護力をパワーアップ

あの日、通信が途絶え、情報収集は困難をきわめました。通信指令車を整備して通信システムを強化。悪天候に長期間耐えられる救護所用大型テントも整備しました。



震災直後から学校の体育館などで避難所生活を強いられた被災者の皆さん。電気も水道も止まり、トイレも使えない。劣悪な環境の中、プライバシーもなく、心身ともに休まらない日々が続きました。

防災倉庫の寄贈

被災した自治体のニーズを調査。人数規模や備品の統一規格を検討し、簡易トイレや給水設備、発電機、照明器具、ランタン、浄水器、パーテーション(仕切り)などを備えた防災倉庫を寄贈しました。

27市町 432カ所



あのとき必要だったものを…



6 原発事故対応

原発事故で不安と闘う人に寄り添う。

「普通の生活を取り戻したい」。しかし、以前と明らかに違っているのが、福島第一原子力発電所の事故で影響を受けた人々の暮らしです。健康面の不安を少しでも軽減できるよう、被ばく状況を把握できる機器の整備などを行いました。



ホールボディーカウンター8台と甲状腺モニターを病院に設置。体内被ばく検査に活用されています。8台

©Nobuyuki Kobayashi

病院に検査機器を整備

約200万人の県民の健康管理調査を担う福島県立医科大学附属病院に医療機器を寄贈しました。



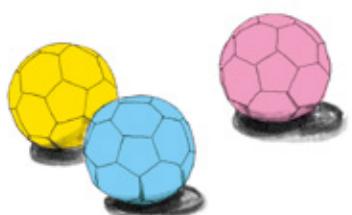
食品放射能測定機器(ベクレルモニター)

「家庭菜園でつくった野菜や飲料用井戸水などを調べたい」という市民の声を受けて、食品放射能測定機器を設置しました。

109台

3年間

海外救援金による復興支援事業は、被害が甚大だった岩手県、宮城県、福島県に加え、青森県、茨城県、栃木県、千葉県、長野県、そして原子力災害事故の影響で全国に避難した方々を対象に、2011年3月から3年間行われました。引き続き、現地の各県支部を中心に、被災地の支援を続けていきます。



899点

体育の授業で使う用具や備品を寄贈した数です。



20,570人

南三陸町に仮設診療所を建設。救急患者の受け入れに必要な医療機器も整備しました。



67人

日赤が運営している介護施設から介護士を派遣。食事や入浴の介助などを支援しました。



1,121世帯
2,284人

いわき市に避難している浪江町民の個別健康調査をしました。



806カ所
34,597点

仮設住宅の集会所に長机、座布団、ホワイトボード、AEDなどを寄贈しました。



47回
5,151人

仮設住宅で暮らす人々を対象に炊き出しによる交流会を開催しました。



160校

学校の保健室に体重計などの備品を整備しました。



8,933点

学校給食をつくるために使う大型冷蔵庫や調理器具などを寄贈しました。



13校 18台

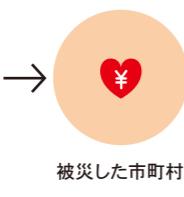
スクールバスを寄贈しました。



437,856人

3県の70歳以上の高齢者を対象に、肺炎球菌ワクチンの接種を支援しました。

多くの義援金が国内外の皆様から寄せられました。全額を被災地にお届けしています。



いろいろ心配もありましたが、義援金をいただいて、力が出ました。本当にありがとうございました。
(2012年2月、日赤が実施した被災者アンケートより)



日本赤十字社 3,315億円
中央共同募金会など* 416億円

合計 3,731億円

*NHK及びNHK厚生文化事業団の受付分含む(2014年6月30日現在)

日本赤十字社は2014年6月30日をもって上記受付分の全額を被災県に送金しています。なお、2014年4月30日現在で被災者に3,581億円(総額の98.4%)が届けられています。



「敵味方の区別なく救う」という戦時救護から始まり、
世界189の国・地域にネットワークをもつ赤十字は、
これからも人道課題の解決に取り組んでまいります。
「苦しんでいる人を救いたい」という思いを結集し、人間のいのちと健康、尊厳を守る」を
理念に掲げる日本赤十字社の活動には、
皆様からお寄せいただく「活動資金」が必要です。
よろしくお願ひいたします。

